

としょかんNEWS 特別号

～館長閑話 最終回～



2016年3月31日
湘北短期大学図書館

【連載】館長閑話(30) 湘北短期大学図書館に感謝いたします

館長 野口 周一

はじめに

この3月31日をもって、私は湘北短期大学を定年退職いたします。思い起こせば、20代後半から教壇に立ち、40年近く講義をしてきたこととなります。そこでは多くの生徒・学生さんとの出会い、そして図書との出会いもありました。

高校教諭時代には、沢木耕太郎さんの『一瞬の夏』（新潮社、1984年）が「朝日新聞」で連載されていました。恐らく世界史の授業だったと思います。授業の最中にその物語を語って聞かせておりました。話のあらすじは、カシアス内藤というピークを過ぎたボクサーが、ボクシングへの情熱を捨てきれず、世界チャンピオンに再度チャレンジするというものです。内藤は再起の過程で、その高校がある群馬県高崎市のジムのヘビー級ボクサーと対戦することになったのです。そのジムがある所は八間通りはちげんといい、私の子どものころは夏には夜店が開かれていた賑やかな場所でした。その通りに、対戦相手の所属するジムがあったのです。ところが、高崎駅から徒歩15分ほどのジムの、沢木さんは見つけられなかったのです。沢木は「見つからないのも無理はなかった。通りが暗いうえに、ジムは表通りからかなり引っ込んだところにあった。しかも、建物はその構えからとうていボクシングとは想像できない古めかしさであり、『森田高崎ジム』という看板も地味で目立たなかった」と書いています。表通りの角には、群馬交響楽団誕生の地といわれる喫茶店ラ・メゾンがありました。ジムの会長については、「ここではボクサーばかりでなくジムのオーナーといえどもどこかで働かなければ喰っていけない。自分は自動車教習所に勤めており、週三日は残業しなくてはならない。今日はそのうちの一日なのだ、と言って森田は苦笑した」と記しています。

また沢木さんの森田さんを見る目が実に優しいのです。取材を終えた沢木さんを森田さんは高崎駅まで送って行くのです。「駅に着き、礼を言って降りようとする、森田も共に降り、小走りに出札口に向かった。私の東京までの切符を買おうとしたのだ。私は慌てて押しとどめ、買ってもらういわれなどないからと断ったが、森田はなかなか承知しようとしなかった。どうにか許してもらい自分で金を払うと、森田は土産物屋に走り、名物らしい菓子の包みを買って戻ってきた。断ったが、押しつけて引こうとしない。今度は私が折れた。この借りは、試合当日に激励賞を贈ることで返せばいい、と思いついたからだ。／しかし、改札口で、よろしくお願ひします、と森田に頭を下げられた時、私は胸に小さな痛みを覚えた。そして、この菓子包みの借りは、とうてい激励賞などで返すことはできないのかもしれない、と思った」——沢木さんのこの誠実な温かさに、私は惹かれるのです。

昨春から、沢木さんは「朝日新聞」で『春に散る』というボクサーを題材にした連載が始まっているのです。今度は何を訴えようとしているのでしょうか。

さて、今回は東洋大学附属図書館の企画展の話をしたと思います。

東洋大学附属図書館 白山図書館蔵書展

昨秋の「余録」に、「一人の女性がぬれた坂道を歩いている。冷たい雨が両手をふさぐ。傘を差す手と白杖^{はくじょう}を握る手。ひと雨ごとに冬へ近づく日々は視覚障害者にはつらい。それでも点字ブロックを頼りに目指す所がある。東京・高田馬場の日本点字図書館だ」で始まり、「7日に生誕100年を迎える故・本間一夫が25歳の時につくった」とありました（「毎日新聞」2015年10月5日付）。

折りも折り、東洋大学附属図書館白山図書館蔵書展は「バリアフリーの世界～だれかの不便さをみんなの使いやすさに～」を開催していました（11月5日～2月29日）。そして「日本点字図書館75周年・創設者本間一夫生誕百年を記念して、この偉業を支えた卒業生の加藤善徳氏に光をあてます」とあります。

この加藤は点字図書館で悪戦苦闘する傍ら、晩年の下村湖人のために資料収集と執筆に寄与されたのでした。私は高校2年のときに加藤を訪ねて、点字図書館に足を運びました。詳細は本学図書館の拙著『生きる力をはぐくむ』（開文社出版、2005年）をご覧ください。

加藤は生涯を「縁の下の力持ち」に徹した人であり、そこに限りない魅力を有する人でした。その仕事のひとつに「救ライ事業」への取り組みがあります。

下村湖人には『論語物語』という名著があります。その一編に「伯牛疾あり」があります。孔子の愛弟子の一人である伯牛は、「天刑病」などと差別され、遺伝病と誤解されるハンセン病にかかり、自らの運命を呪い、かつ見舞いの足の遠のいていた孔子の心情にまで猜疑の目を向けるのでした。

旺文社文庫版『論語物語』（旺文社、1966年）には加藤の解説が入っています。加藤は「私はそれまでにたびたび、村山の全生園に癩^{らい}患者を慰問して、癩という絶望的な病気の実態をよく知っていた」、「当時は療養所にはいれば、死ぬまで一步も外へ出られず、患者たちは社会の灯が恋しく、それを見るために土砂をはこんで、二〇メートルほどの小山を築いていた。その小山にむらがる、顔も手もくずれ果てた患者たちを見て、涙を流した思い出があった。したがって伯牛の苦悶が身にしみてわかった」と書いています。

後年、「天声人語」は「ハンセン病について明快な判決が出た。隔離は違憲であるとの熊本地裁の判決だ」に始まり、患者さんの苦しみを「<ぼくは両親や妻子にさえ一言も告げず／突然 行方をくらました／無責任きわまる薄情者です／両親はうらみながら世を去ったでしょう／それが何よりの親孝行です／妻子への心からのおわびです>。こう言ってハンセン病患者の『うめき』を書き留めた詩だ（河野進『おにぎりの詩』柏樹社）」と紹介しました（「朝日新聞」2001年5月12日付）。

その後、^{こだま}冨雄二さん（享年82）の苦闘は新聞報道等によって伝えられています。群馬大学の学生も、同県草津町にある療養所・栗生楽泉園^{くりゅう}で入所者の高齢化が進むなか、ハンセン病を次世代にわかりやすく伝えようと、ガイドブックとドキュメンタリー映画の製作に取り組んでいます（「毎日新聞」2015年10月21日付、地方版）。

おわりに

世は待機児童の問題に揺れ続けています。最近の「天声人語」に、子どもを保育園に入れることができなかった働く母親が、「何なんだよ」と怒りをぶちまけるブログが話題になっている、ことを伝えています。そして、病児保育を手掛けるNPO法人フローレンスの駒崎弘樹さんが「保育園が増えない理由を分析し、首長や地方議員にとにかく文句を言おうという呼びかけ」を提唱しています。最後に「新国立競技場で、また問題が表面化した」ことをうけて、冒頭のブログが「オリンピックで何百億円無駄に使ってんだよ、保育園作れよ」という訴えを紹介しています（「朝日新聞」2016年3月5日付）。

駒崎さんについては、私も氏の主張「社会のドアは食卓に」に共感しています。このことは、「おじいちゃん、今日はテレビを観たらあかん日やで」というエッセイに書いております（『ほっと れもんてい』2009年6月号、あゆのこ保育園内）。

新国立競技場の建設費を保育園に回せないかという訴えについて、私は松田道雄の『私の読んだ本』（岩波書店、岩波新書（青版）786、1971年）を思い出しました。松田が旧制中学から難関の第三高等学校を受験する際の思い出を語ったものです。「京都予備校の冬期臨時講習会というのでした。十二月のおわりから正月の休みをぶっ通して二週間、朝の八時から夕方五時までつめ込みの講習だった。客寄せのために、受験書で有名な先生方が東京から呼びよせられていた」とあり、岡田実麿先生について「この先生のかいた英文解釈の本をもっていたので、名を知っていた。謹直な人がらで、たいへん丁寧に教えられた。その人が講義の途中で、『受験勉強などというのは、むだなことです。軍艦一隻をつくらなければ、高等学校は十ぐらい建ちます』といわれたときは、おやっと思った。教壇の上から政府のやっていることへの批判をきいたのははじめてだった」――。

また、「保育士目指すの僕らだ」と「国会正門前で、保育士を目指す高校生らが、待遇改善を求めてプラカードを掲げながら声を上げた」とも報道されました（「東京新聞」2016年3月26日付）。――私は保育系学科に学ぶ学生たちの優しい心情を高く評価しながらも、彼らの社会的関心の薄さを心配していました。しかし、高校生がついに立ち上がったというニュースに明るさを感じました。

30回にわたる連載に、お付き合いくださった方々がいらっしゃいます。感想を寄せてくださった方々にも感謝しております。実に勇気づけられました。

この連載を通じて、文章を書くことの難しさ、わが身の力のなさ、等々を改めて感じております。お読みくださった方々はもちろんのこと、紙面をご提供くださった図書館の方々にも、心より御礼申し上げます。

私は、4月1日から足利工業大学の教職課程センターに赴任いたします。『一瞬の夏』でカシアス内藤は、なぜ再起をはかろうとしたのでしょうか。私も、まだまだ私を必要としてくださる所で仕事ができることを幸せと思います。

「館長閑話に寄せて」

相模女子大学 名誉教授
福田 須美子

「館長閑話」、毎回楽しませていただいております。第28回の『ガラスのうさぎ』（高木敏子作）にまつわるお話には、ことのほか胸を打たれました。私自身も先生と同じく戦争を知らない世代ではありますが、遠くから戦争の足音が聞こえてくる昨今、平和への思いは募るばかりです。

「閑話」には、中学生の頃同書を読み平和の使徒にならんとして外務省に入省した女性の話やもめている地域に行って人々の役に立ちたいと願う若者の思いなどが取り上げられ、まさに「ペンは剣よりも強し」、人の心を動かすことばの力・読書の力を思い起こさせてくれます。この閑話は、まちがいなく子どもの保育・教育を目指す若き学生さんたちの気持ちを揺り動かすものになることでしょう。元イクメンの先生の例のように、子どもと接する者はとりわけ「幼き命を守らねば」と思うものだからです。

保育実習巡視で訪れた二宮の駅頭に立つガラスのうさぎの少女は、先生を太平洋戦争末期へとまた40年前の隣町大磯での子育て奮闘中の日々へと誘^{いざな}います。一見のどかな相模湾沿いの町で起こった機銃掃射・弾丸の雨、ここでガラスのうさぎを手を持つ少女・高木敏子は、東京大空襲で母と妹を失い傷心癒えぬなか、さらなる追い討ちとして父の死までも体験したのです。少女と別れた後、百合丘保育園で出迎えてくれた子どもたちの笑顔はまさに天使の微笑、先生はさぞかし安堵なさったことでしょう。

数年前、神奈川県保育士養成協議会での出会いから先生と研究交流をさせていただくようになりましたが、よりよい保育・教育を模索する先生のお姿や先生との対話から多くのことを学ばせていただきました。談話の基底には、いつも「平和への希求」の思いがあったように思います。とはいえ残念ながら今日なお戦乱は続き拡大しつつあります。かの地で若き女性マララさんは訴えます。「教育こそが唯一の解決策である」と。

先生はまもなく定年を迎えられるとのことですが、先生の教育のさらなる歩みに期待したいと思います。

